
黒記憶《ブラックメモリー》

無能那黒音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックメモリー
黒記憶

【Nコード】

N0837X

【作者名】

無能那黒音

【あらすじ】

この話は、N君の内に秘めた記憶メモリーについてのお話です。
コメントいただけると光栄です。
期待はずれですみません。

ダーク・メモリー

君達は、心の片隅に消し去れない記憶、思いなどの情報データがあるだろう。消そうとしてもロックされていて、消すことは愚か更新して新しく（鮮明に）してしまう。だからと言って、気にしないでいるとふとした時、思い出し邪魔になる人もいる。それに悩むN君とそのまわりに起きた出来事の話…。

僕は、N。皆にも僕にも、'バラセナイ'秘密がある。それは、恥ずかしいだけではない。数えると、…指を使って数える量ではない。できればの話だが一掃してほしい。このフォルダ内を全て削除デリートしたい。人々は、これを黒歴史などと言う人もいるが黒も黒、どんな色も受け付けない黒だ。それを思い出すことさえ嫌なのだ。それをおこした僕も大嫌いだ。

「消してあげようか。」

「誰!？」

誰もいない。きつと空耳だろう。僕は、いつもどおりの仕度をすると学校へ向かった。

「おはよう。」

ん、Hさんか。

「おはよう。」

そう言っつて、イヤホンを付け直した。単に付けたのではない。彼女を見ると何か変な電気が体を走る。だから、逆の行動をしてしまっただ。うのだ。

教室に入ると教科書を机に入れ、窓を開ける。授業が始まると、退屈凌ぎに外を見る。誰かが窓を閉めた。寒かったのだろうか。仕方がない、寝る気はないから廊下を眺めた。廊下の窓ガラスには、つまらない顔をした人がこっちを見ていた。

昼食に2、3の男子が来た。

「何の曲を聴いているんだ。」

答える気はなかった。だが、クラスに敵をつくる気もない。仕方なくイヤホンを取って、聞いてきた男子に渡した。

「へー、交響曲か。」

「……。」

変わらぬ僕の顔に気まずいと思ったのか、つまらないとおもったのか別の場所へ行った。僕は、イヤホンをつけるとさっきと同じようぼーっとしていた。もちろん、最初からこんなつまらない人間ではなかった、中学生までは。明るく元気が僕の取り柄だったが、…変わってしまった。自分の愚かさに、恥ずかしさに。そして、自分が嫌いになった。友達は、それ以来減っていくばかり。現在、Hさんともう1人S君だったと思う人が僕の知っている範囲の友達。つまり、ネットなどの顔も知らない人を除いてだ。友達と言っても会話は成り立っていないし、顔もあまり見ない。一応、挨拶する程度だ。

ぼーっとする。そして、帰りのチャイムが鳴る。僕は、帰宅部。帰ってもぼーっとするだけだが。

途中、歩道橋を通過して電車に乗り家に着く。歩道橋をのぼっているとあの声が聞こえた。

「ちよっとお話しようよ。」

背筋に寒気がはしった。

「君は…。」

よく見ると、昼間の声と今の声、どっちも同じ声。姿は人だ…。いや、人とは思えぬやつれ顔だ。

「君は、自分が嫌いなんだね。」

「……。」

「中学校の時から？」

「僕、覚えている？」

一方的な質問。もう1度、目を凝らしてカレを見た。フードで隠され、黒い布とチェーンできつく巻かれている……。誰だか分かるはずもない。

「そうか、残念だな。」

僕は、何が言いたいのか理解できなかった。

「まあいいや。もう1つ聞きたいことがあるんだ。」

「もう1つ？」

「そう。君は、皆が『黒歴史』と呼ぶもの消したいんだっ
たよね。」

「何で、それを……。」

「何でって、その心が言っているじゃないか。」

「……。」

「じゃ、消してあげようか。」

最初に、カレが沈黙を破った。

「で、出来るのか？」

「うん。」

「君が、望むなら。」

僕は、消えてほしいと望んだ。

そして、。

リセット・メモリー

僕は、家のベットで寝ていた。体が少しぎこちなくなった気がした。しかし、心は軽くなった気もした。何か大切なものを失ったような……。

いつもどおりの支度をする、勢いよく学校へ向かった。

「おはよう。」

あ、Hさんだ。

「おはよう！」

今日は、元気なんだねとHさん。

そうだね、と言う僕。

クラスに入ると、みんなに「おはよう」と言った。クラス内のみんなが顔を見合わせていた。僕は、昨日とは変わった。と言うより、元の僕に戻ったと言うべきか。昨日の男子も、最初は戸惑っていたがすぐに仲良くなった。うれしさのあまり、トイレに行つて鏡を見た。顔を見た。昨日の僕とは、似ても似つかぬ表情をした僕がいた。

ただ、瞳には何も映っていなかった。

授業中には、黒板を見るほうが多くなった。質問もするし、ノートもとる。ただ、その量はおしゃべりと比べるとアリとりんど、つまりごく少ないと言うことだ。みんなと遊んだり、部活を今からでもと思い見学もしていた。今日と昨日、こんなに変わったのに何も気にしなかった。こんなにテンションアゲアゲだと帰りの道もあったという間だ。ポケットからは、イヤホンが垂れていた。

次の日も、次の日もこんな調子でいた。しかし、人生山あり谷あり。悪いことも訪れる。これはちよつとしたことだが、下校途中に

男子生徒3人と帰る約束をしていた。もちろん約束の場所に来た。校門で待ったが、いつこうに来ない。30分が過ぎた。これ以上過ぎると、電車が……。仕方なく、帰った。

次の日

来なかったことを聞いてみたら、その中のW君は東門だろつと言った。あ、忘れていた。僕は、彼に謝ったが喋らなくなってしまった。何度目かに彼は不思議なことを言った。

「これで何度目だよ。」

え？僕は、彼ともめたことは記憶にある。ただ、こんな展開は初めてだ。なんで、キレているんだ。雰囲気が悪化した。何も言わず、僕は帰った。

次の日

朝、いつもより1本早い電車に乗った。昨日のことが理解できず、あまり寝れなかったのだ。やっぱり人は少ない。乗客は、4人。おじいさん、おばあさん、孫と思われる子供1人、目の前にフードを被った僕と同じぐらいの身長の人が1人。なぜか僕は、彼に惹かれた。彼のまわり（オーラ？）が寂しそうだっただけなのか、どこかであったような、僕に似ているような……。彼の顔を見ようとすると、真つ暗になった。トンネルだ。トンネルを抜けると彼の姿は、消えていた。瞬間移動？きつと、隣の車両に行っただけであろう。自分の駅が来ると、体勢を整え電車を降りた。僕の次に降りた人は、彼であった。が、気づかず改札口までいつもどおりに行った。彼は僕に何かしようとしていたが、次第に放れていった。正確に言うと彼は置いてかれたのだ。

学校につくとすぐ寝た。ここが、僕の2番目に落ち着く所なのだ。気づくと、みんながしゃべっていた。昨日のことで、W君とはまだピリピリ状態である。他の男子にカラオケを誘われ、すっきりして

いないがついて行った。このストレスを吐き出すべく、歌った。最初は、気持ち良かった。ただ、普段交響曲しか聴かない僕にとって J P O P など皆無分からなかった。みんなと歌う曲の違いに何か恥ずかしい感じがした。グラスに映った人は、僕から目をそらしていた。そうなることを予測していたように。みんな僕を気遣ってくれたがそれがさらにみんなとの距離を感じてしまった。もう、泣くそれしかできなかった。

もう、学校には行きたくない。誰とも会いたくない。

帰り道、頭はその言葉でいっぱいだった。

リターン・メモリー

家に入ると真っ先に扉を閉めた。雨戸もカーテンも。ある意味僕だけの小さな世界。なんでこうなったのかわからない。勉強にも手がつかなかった。実は、言うのは嫌だから言わなかったが他にも嫌なことがあった。思い出すと、ほおの後ろがすこし冷たくなり、顔を隠したくなる出来事が。生まれつき足が不自由だと知らず、全校生徒の前で

「どうして、足が悪くなっただんですか？」

なんて言った事。もう忘れたかったから、あえて言わなかったが。僕が変わって3日目のことであった。テストで自分じゃないのに返事をしてしまった事。ああ、人と会う、喋るすべての行動に恐怖を感じてしまった。

「それを、君が望んだんだよ。」

この声。僕の記憶が溢れるように思い出した。暗い僕。それを解き放った一言。

「消してあげようか。」

愚かだ。消したって、人はまた繰り返す。動物だって、群れで移動する生き物は仲間の犠牲が経験となり、危険回避をする。つまり、経験を感情をとおして見るといくつかのカテゴリに分かれる。もちろん動物にだってあるかも知れない。そのカテゴリに嫌な記憶（自分の失敗によりできた）、恥ずかしい記憶などが集まったフォルダもある。このフォルダを、'黒歴史'と名付ける人もいる。それは、嫌な情報^{データ}であるが決してゴミではない。それは、経験という大きなフォルダの一部なのだから。それに、カレが気づかせてくれた。もしかして、カレは……もう1人の……。

「気づいたようだね。」

「じゃあ、やっぱり君は……。」

「そう、当たっているよ。」

「じゃ……。」

「ごめんね。話せる時間が少ないんだ。僕が話せる時間は君が自分自身を見つめる時間。」

「それも、後ろ向きな気持ちの時しか姿を現せないんだ。」

「……。」

「大丈夫。いつも君の近くにいるんだから。」

カレのチエーンは切れて落ちた。フードがめくられて顔があらわになった。僕が1番嫌いだっただ顔をしていた。

「ありがとう。」

そう言って、笑った。

「N、N君。」

女性の声、聞こえるが返事ができない。

「目、開けてよ。」

体にひどい痛みを感じた。目の前は……。包帯に巻かれた足が毛布から出ていた。

「N！」

Hさんが。

「Hさん……。なんで泣いているの。」

「だって、だって……。」

その一言が、さらに泣かしてしまった。看護婦の話によると歩道橋の上から飛び降りたらしい。記憶には全くないが……。じゃあ、あの出来事は……。

空いた窓から、柔らかな風が僕を包んだ。窓からは、温かく見つめられる気がした。しかし、誰もいない。ゴミ箱には、何枚かの日めくりカレンダーのちぎった紙が捨てられていた。

君達の中には、いろんなことに悩んでいる人がいるだろう。しかし、失っていい物といけない物、それはしっかり見分けなければいけない。そんな人には、気づいていないかもしれないが、近くにある窓やガラスには映っているかもしれない、カレがね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0837x/>

黒記憶《ブラックメモリー》

2011年9月27日08時14分発行